

特集 コロナに克つⅡ ～つながりを紡ぎ続ける

01

コロナ禍から考える人間のつながり
ーともに食べる。ともに学ぶ。ともに暮す。

聞き手 加賀美 太記（阪南大学 准教授）
山極 壽一（総合地球環境学研究所 所長）



山極 壽一 氏

新型コロナ禍のなか、感染の拡大を防ぐために、私たちの暮らしは様々な制限が課せられることになった。ともに集まって語り合うことも、ともに食事をとることも、そして学生たちにとっては共に学びあうことも制限された。

もちろん、こうしたコミュニケーションの制限に対応するため、インターネットを核とした、多くのツールが普及した。困難ななかでも、知恵を絞って、私たちは互いのつながりを維持しようとしている。

しかし、そもそも、私たちのつながりとはどのようなものなのだろうか。当たり前のようにつながりあっているがゆえに、学術的な研究はともかく、日々の暮らしのなかでつながりについて考える機会はそう多くはない。そこで今回は、前京都大学総長で、現在、総合地球環境学研究所所長を務める山極壽一氏にお話を伺った。ゴリラ研究の世界的権威として知られる山極氏は、著書やインタビューにおいて、自身の研究成果から、オンラインのつながりの意義や限界、あるいは食事という行為の重要性を説いている。

私たち人間社会の特徴とは何か、私たち人間のつながりとは何か、つながりを紡ぐためには何が必要なのか。コロナ禍という、つながりを維持するための様々な方法が制限される今、本インタビューが改めてつながりについて考える一助となれば幸いである。

※インタビューは2022年2月3日午後にリモートにて行いました。内容は、その時点の情報に基づいたものです。

学びにおけるオンラインの限界は

【加賀美】山極先生は、対面コミュニケーションの重要性を説くとともに、スマートフォンやインターネットといったデジタルな技術によるつながり

りが、人間の能力を超えたものになりつつあるのではないかと問題提起されておられます。

しかし、新型コロナ禍において、社会ではオンライン / リモートの仕組みが急速に普及しました。大学でも講義のオンライン化が進みました。現在では、オンライン講義について学生・教員の双方から肯定的な意見が少なからず出てきているように思います。

まずは、大学における学びや教育という視点から、学びのオンライン化にどのような可能性があり、どのような問題があると考えられるでしょうか。

【山極】 オンラインやリモートには利点もあります。たとえば、移動しなくていいし、コストが安く、いつでも自分の好きなかたちで出席ができる。しかも先生と 1 対 1 で話ができる。これらは利点ですよね。YouTube で配信すれば、何万人が講義を受けられるわけだし、これまでとは違う利点が出てきたのは確かだけど、学びという点からは不十分だと思います。

ぼくは、3つの自由によって、人間は社会を作ってきたと考えています。3つの自由というのは、「動く自由」、「集まる自由」、「対話する自由」です。類人猿、ゴリラやチンパンジーと比較するとよく分かるのだけれど、ゴリラもチンパンジーも1年間あるいは1日に動き回る範囲は決まっていて、非常に狭い。集まる自由も、自分の群れでしか集まれない。他の群れに勝手に入っていくことはできないし、一度群れを離れたら自分の群れに戻ることもできない。

でも、人間は自由自在に遠い距離を歩き回り、いろいろな人に出会うことができる。虫や鳥や獣、あるいは生き物だけでなく、さまざまな風景や現象にも出会うことがで

きる。そして、それを語ることができる。つまり、人間は常に、出会い気付くことによって、新しい未来を構想し、世界の変化を知ることができているわけだね。

学びというのは、この人間の3つの自由によって成り立っている。学ぶためには、出会わなくちゃいけない。実際にリアルで対面しなくちゃいけない。しかも、ただ人や物に出会うのではなくて、周囲の状況をきちんと共有しながら出会う必要がある。橋の上で出会う、学校のキャンパスで出会う、あるいは商店街で出会う、飲み屋で出会う、これらは全然違った出会いです。学校のキャンパスの講義室、あるいはゼミ室で出会いながら、同じ学びをする仲間や教員と一緒に、お互いが考えていること、頭の中にあること、あるいは身体の中に埋まりこんでいるものを共有する経験が、学びにとっては不可欠です。それが、オンラインではできなくなるというのが、すごく大きい。

【加賀美】 オンラインでは、学びにとって極めて重要な、状況を共有しながら出会うことが難しいということですね。

【山極】 できないよね。今、ぼくはちゃんとスーツを着ているわけだけど、オンラインだと下はパジャマだっていいわけでしょう。しかも、画面背景をきちんと作っているから、隣に誰かいたって画面越しには見えないよね。つまり、相手と場所を共有していないという不安感が、無意識のうちに存在する。それが、なかなか同調しにくい、他者と一体化しにくい、そうした壁になっているんだと思います。

それに大学生ではなくて、小中学生にとっては、身体共有によって世界を理解していくことがとりわけ必要です。あるい

は、他者と身体を共有することによって、他者が持っている能力を知る。あるいは、他者から見た自分というものを、きちんと位置付けることができるようになる。これが小学校や中学校、つまり初等教育の生徒たちの学びだと思えます。それがオンラインではできなくなる。それは、とてもまずいことだと思います。

実際、大学生や高校生ぐらいになると、情報を頭でハンドリングすることができるようになるけれど、小学生や中学生だと、情報と身体性が一体化しているわけです。だから、たとえば小学生に道徳を教えるときに、頭で教えるのでは身につかないですよ。身体性に入り込んでいかないと、何をやらなければいけないのか、何をやらたら褒められるのかが納得できない。

身体というものが基盤になって、世界と対峙していく。そういう経験をいくつも経ないと、自分で、自分の身体と自分の心というものを、きちんと理解することができなくなると思えます。

言葉というコミュニケーションの役割と限界

【加賀美】 先程、同調という単語が出ましたが、山極先生は人間が信頼関係を築くには、時間を共有して、互いに同調することが必要だと論じておられます。

ただ、一般的には言葉によるコミュニケーションが、信頼には重要だとされているように思うのですが、なぜ言葉ではなく同調が必要なのでしょう。

【山極】 ぼくはね、言葉というのは不完全なコミュニケーションだと思っているんですよ。言葉は気持ちを伝え合うのには適し

ていない。それがゴリラとずっと付き合ってきたからよく分かるんです。

ゴリラは言葉をしゃべりません。だけど気持ちを伝え合うことはできる。言葉がないせいで、むしろ気持ちはストレートに伝わる。なぜかと言うと、言葉というのは、世界にさまざまな名前を付けて分類し、要素に分けて、再解釈することなんです。言葉によって違うものを一緒にできるし、同じものを分けることもできる。

しかも言葉はポータブルだから重さがない。どこにでも持ち運び可能で、遠くの、あるいは過去の他者の経験を、言葉を通じて体験することができる。ただ、実際には体験していないわけだよね。言葉は抽象化、シンボル化して伝えるわけだから、100パーセント完全に再現できるわけではない。他者の体験だけではなく、自分の気持ちもそうです。

人間にはサルと同じ視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五感があります。科学技術は、視覚と聴覚を拡大するように働いてきたんですね。言葉は、視覚を音に転写させて、それをシンボル化して伝える1つの仕組みです。今のSNSやインターネットも、もっぱら視覚と聴覚を利用しています。

ただ、嗅覚・味覚・触覚については、技術ではなかなか拡大できない。視覚・聴覚は仲間と共有しやすい感覚なんだけど、嗅覚・味覚・触覚は共有しにくいんですよ。たとえば、「変なおいがするね」と言っても、どんな変なおいなのかを、言葉でそのまま表現できないでしょ。だからアナロジーを使うわけです。卵の腐ったようなとか、どぶ川のようなとか、りんごのような甘い香りとか。

そういう風にアナロジーを使ったとしても、本当にそういったにおいかどうかは、実際に目にしないと、なかなか納得できな

い。実は、われわれが嗅覚・味覚・触覚で感じたことは、視覚・聴覚に転用して初めて理解できるわけです。だから百聞は一見に如かずという言葉があるように、われわれは視覚優位の世界に住んでいて、見たことが真実なんです。見ないうちは、それは真実ではない。

だから積極的な努力が必要なんです。相手と同じにおいをかいでる、相手と同じように味わっている、相手と同じように肌触りを感じているんだなっていう努力が。そして、そこに共感力が芽生えて、同調する意識が働く。それが重要なんだよね。

そうすると、気持ちは身体そのものなんです。気持ちは身体の外になかなか出てこない。情報化できないものなんです。だから、言葉にとって、気持ちを伝えることはあまり得手ではない。

それでは何のために言葉が出てきたのかというと、考えるために出てきたんですよ。言葉によって世界が構造化されて、あるいは因果関係ができて、過去や現在や未来、原因や結果が1つの中に見えるようになった。

これはゴリラの感じている世界と全く違う、人間だけの世界です。それを仲間と共有することが始まった。つまり、気持ちを伝え合うことによって言葉が出てきたのではなく、物語を作ることが言葉の大きなファンクションだった。それを間違えてはいけない。

今、われわれはインターネットやSNSで気持ちを伝えようとするけれど、それは言葉の本来の機能ではないということを、きちんと理解する必要があります。言葉は、頭の中にある知識や、世界を切り分けるなかで情報として発達してきた、そうしたコミュニケーション手段であって、気持ちを言葉に乗せて伝えようと思っても、それは無理だということですね。

むしろ言葉が伴わない音楽のほうが、よっぽど気持ちが伝わるかもしれないよ。音楽は、言葉と同じように、音の組み合わせによって文法ができている。でも、言葉の文法と違って、音楽は訳す必要がない。意味を伝えないから。音楽は意味を伝えずに、全体的な感覚や気持ちを伝えるわけです。だから、言葉よりも音楽が先に出てきた、とぼくは思っているんです。

つまり、意味を伝えるということは、気持ちを伝えるということをして 100 パーセント反映していないんですよ。言葉は世界を意味付けた。もしくは価値付けたと言ってもいい。そこを仲間と共有することに言葉は役立った。ただ、そうした役割が忘れられ始めているから、言葉によって傷ついてしまう。今、フェイクニュースのように、言葉によってどんどん間違った方向に誘導されているのは、その表れだと思いますね。

【加賀美】 信頼し合うためには、まずは身体の同調が必要だということですね。

【山極】 共感 [エンパシー] の起源は、同調です。身体を触れ合わせることで、共鳴させることが、同調の最初なんです。それから、さらに認知能力が加わり、相手が置かれている立場を、相手の立場になって理解することができるようになる。これが同情 [シンパシー] です。

英語のエンパシーとシンパシーは違うものです。エンパシーはサルでもできる。でも、相手の気持ちが分かるということと、同情する、つまり相手を助けたいと思うという気持ちは違うものです。相手を助けたいと思うためには、相手が置かれている立場を理解しなくちゃいけない。サルにはそれは理解できないんですよ。だから、同情というのは、類人猿以上にならないとなか

なか起きてこない。だって相手の気持ちが分かったら、相手を利用することだってできるわけでしょう。相手を助けたいと思う気持ちがなければ、相手に寄り添えないんですよ。

さらに、自分と相手だけではなくて、みんなと一緒に苦難を乗り越えていこうという共同意識のコンパッションがあるけれど、それは人間だけにしか表れない行為なんです。だから、やっぱり段階があるんだと思います。

ただ、基本的には、それぞれに身体と同調というものが要なんですね。類人猿は自分がその現場にいないければ、同情したり、相手を助けたりできない。人間は相手と離れていても、それができる心を持っている。それは言葉を持ったおかげだと思うけれど、その基本は、身体を共鳴させることにあるのだと思います。それを忘れてはいけません。

人類にとっての「食」の意味

【加賀美】 身体と同調、共鳴ともかわると思うのですが、コロナ禍では共に食事をすることが大きく損なわれました。

人間のつながりや信頼において、とくに「食」の果たす役割はどのようなものなのでしょう。

【山極】 ぼくは、食事という行為は、人間にとって最も古い文化装置だと思っています。なぜかという、たまにだけゴリラやチンパンジーや類人猿も食物の分配はするんですよ。ただ、自分から積極的に相手に食物を与えることは、ほとんどありません。要求されてはじめて、相手に食物を分ける。なおかつ、食物を得た場所でしか分

配は起こらない。でも、人間は遠くから食物を運んできて、なおかつ食物を採集する段階で、自分だけでそれを食べてしまわずに仲間のもとに持ち帰り、仲間と食物を囲んで一緒に共食をする。

そして、この共食を始めたからこそ、人類は、熱帯雨林という、食物が豊富で安全な場所を出ていくことができたと考えられます。熱帯雨林の外は植物が分散していて、食物の採集に時間がかかるし、長い距離を歩かなくちゃいけない。しかも、肉食動物に襲われたとき、森林だったら木に登れば助かるけど、木がないから助からない。それで、分担しなければならなくなったんです。身重の女性や小さな子どもは、長い距離を歩いて食物を探すのには適していないから、安全な場所に隠れていて、屈強な者が食物を採集して、それを持ち帰って食べるという行為が始まった。それを実現したのが、人類だけに現れた直立二足歩行という変な歩行様式です。二足歩行で自由になった手で、食物を運んだと思うんですね。

だから人類は、類人猿が進出できなかった森林の外で生きのびることができて、それを力にして、社会力を強化して、アフリカの外へと出ていくことができた。そうしたとき、力になったのは共感能力なんですよ。遠くに食料を集めに行った仲間に対して期待をする、何か自分の好きなものを持ち帰ってきてくれるに違いない。食物を集めている方は、待っている仲間が頭に浮かんで、自分で食べてしまわずに食物を持ち帰る。そういう能力が芽生えた。

しかも、食物を通じて、仲間と自分、仲間同士の関係を紡ぐことができる。つまり、食が仲間の絆を作るっていうことに気が付いたわけだね。サルも類人猿も、基本的に食べるという行為は、個人的な行為で、仲間と一緒にする行為ではないんです。で

も、人間はわざわざ集まって食べることを始めた。これが食事という行為なんですよ。サルから見たら、けんかの原因になる食物を挟んで、向かい合って食べるなんてとんでもないことです。サルにとっては、強いサルが食物を独占して、弱いサルは別の場所を探しに行くというのが当たり前だけど、それはけんかを防ぐためにできたサルの群れのルールなんですね。

それを人間は食物を間に挟んで、私とあなたは、食物が原因でけんかをするようなことはしませんよ、そういう前提をおいて食事をしているわけだよね。日常的に当たり前のように、食物を囲んで談笑しているから、それを今の人間は忘れてしまっているけれど、人間と共通する胃腸を持ったサルや類人猿にとっては、とんでもない行為なんですよ。

ただ、そのとんでもない行為を始めたからこそ、人間の社会力が向上した。われわれは食事という機会を毎日のようにもつことによって、お互いの絆を確かめ合っているわけです。われわれは、肉食動物のように、3日あるいは1週間に一度、たくさんの肉を食べればいいという胃腸ではなく、毎日何度も食事をする必要がある。だから、食事という時間も、毎日、何度も巡ってくる。人類は初期の時代に、それを社会的な絆を作るために利用したんですね。

それが今、全く忘れられている。食事というのは、会社の上司や嫌な家族とも一緒に食べたりしなければならない、むしろ煩わしいものだと考えて、自分が好きなものを、好きな時間に、好きな場所で食べられるということを欲求した。だから、コンビニエンスストアや中食、あるいはレトルト食品などが産業になったわけです。そうして自分の欲求を満たすことはできたかもしれないけれど、食べるという行為に、人間

の社会的意味が強く付与されていたことを忘れちゃったわけだね。そのおかげで人々のつながりが薄れた。

食事というのは、もちろん、しがらみといった意味では厄介なものかもしれないけれど、人と人とを出会わせ、人と人とをつなぎ留める大きな機能があったんですよ。それがこのコロナ禍で、さらに失われてしまった。これは非常にネガティブな影響が出てくると思いますね。

たとえプラスチックの壁を隔ていたとしても、同じ場所で、同じ味を共有しながら食事という時間を作ることは必要だと思うよ。面倒だからみんな個食にしましょう、レストランに行かないようにしましょう、飲み会も辞めましょう、というのは一時的には仕方がないとしたって、それを良いことに、外に出かけなくなったらダメだよなと思いますね。

【加賀美】 共に食事をとることに、社会的な大きな意味があったのですね。

ちなみに、コロナ禍以前、京都大学の学食にボッチ席と呼ばれる一人用のスペースができて話題になったことがありました。こうした、一人だけ集団の中で食事するということにも、同じような意味があるのでしょうか。

【山極】 ボッチ席ができたのはね、あの当時の、非常に屈折した若者の精神的な悩みが表れているわけです。みんなで食べたいんだけど、そういう勇気がない。だけど1人で食事しているのを見られたくもない。ボッチ席だと、型ができてるわけだから、1人で食べててもそんなに違和感を持たれない。こういう風に、すごく屈折してたわけだよ。

ただ、ぼくは食事というのは最も古い人

間の文化であり、また社交だと思ってるんですよ。社交というからには、ホストやファシリテーターが必要なんだよね。一緒に食事をしましょうと言ったとき、見ず知らずの人がパラパラと勝手に集まってきて、それで食事ができるわけじゃない。そこには、それをファシリテートする人が必要なんだよね。1人で食べたら食事なんてあつという間に終わっちゃうけど、みんなで食べると、みんなで食べる速度を合わせるから時間かかるじゃないですか。その時間がいいんですよ。

信頼や期待、そういったものを人々の間で醸成するには時間が必要で、僕は信頼関係というのは、時間の関数だと思っているんです。時間をかければかけるほど信頼関係は深まる。いかにお金をかけたとしても、30秒や1分足らずじゃあ信頼関係は作れませんよ。

時間をかけるのは、それが何であってもいいんです。スポーツでもいいし、音楽の合奏でもいいし、ゲームでもいい。けれど、さっきも言ったように、食事は必ず1日に数回やってくる行事なんですよ。その機会をもっと有効に利用しなくちゃいけないんじゃないかと思うんだよね。

だから、もし、そういったひとりぼっちでしか食べられない子がいたら、ホストを作って食事の席に呼んであげるとかも必要だろうね。ご存じだと思うけれど、全国で子ども食堂がどんどん広がってますよね。食事という機会に、親と一緒に食事ができない子、あるいは親がいなくて、あるいは片親で、なかなかみんなと一緒に食事ができない子を呼び集めて、子どもだけじゃなくて親同士も、あるいは子どもがいない人たちも、そこで食事をしながら談笑して仲間の関係を作る。これがすごく増えているけれど、実はそれが一番自然に作れる仲間

の関係なんだと思います。特に子どもにとってはね。それを忘れてはいけないんじゃないかな。

共助の仕組みとしての共同体

【加賀美】 いま、子どもの話も出ましたが、山極先生は人間の社会性の特徴を、家族と地域社会の両立にあると論じられています。そうした安定的なつながりを保てる規模は150人であるという説も紹介されています。これはどういったものなのでしょうか。

【山極】 150人というのは、ダンバー数と呼ばれています。人類が脳を大きくするにしたがって増やしてきた集団のサイズであり、現代人の脳の大きさ、だいたい1,400ccの大きさの脳に対応する数なんですね。

200万年前に人間の脳は大きくなり始めたけど、それまではゴリラと同じくらいの脳の大きさだった。そのころの集団は、現在のゴリラの集団サイズ、大体10～20頭ぐらいと同じだろうと言われています。それから200万年前に600ccを超えたときに30人ぐらいになって、さらに50人、100人と脳容量の増大に対応して集団のサイズは大きくなってきた。それが現代人に至ると150人だという話です。

ぼくに言わせると、これは家族と複数の家族を含む共同体のサイズです。「共同体」のサイズですよ。150人が、ただそこにいるわけじゃなくて、そのなかに家族が複数あるわけです。この家族と複数の家族を含んだ共同体という重層構造の社会が、非常に大きな力を発揮したから、人類は世界中に広がることができた。つまり、この重層構造は、すごく柔軟性に富んでいて絆が強いから、どんな自然環境にも対応できたん

です。この重層構造があったから、1 人で立ち向かえない困難に、みんなで立ち向かうことができた。それが、人類がこれほど発展した理由でしょう。

この重層構造の社会において重要なことは、家族も、150 人からなる共同体も、実は言葉でつながっていないってことなんです。ぼくは、これが音楽的なコミュニケーションでつながっていると思っています。音楽的コミュニケーションというのは、たとえば祭りのお囃子です。土地の人は、みんな知ってる。盆踊りもみんなできる。そういう音楽的なものです。

こうした音楽的コミュニケーションを拡大解釈してみると、日常的な身振り、手振り、仕草、そういったものもみんな共通していますよね。方言が共通してるように。食事だってそうだし、服装だってそうです。あるいは街並みや家の構造にも、土地土地の様式がありますよね。本来それは、その土地土地の身体のリズムに合わせて作られている筈で、音楽的と言えるのではないかと思います。そこに言葉は、原則的に介在しない。人間の身体の中に埋め込まれている文化を共有しているからこそ、人々は自然な流れに沿って交流できる。その証拠に、異文化の人が入ってきたらすぐに分かるわけです。あっ、ちょっと動きがおかしいとか、立ち居振る舞いが変だよねってわれわれは思うわけです。それは身体のリズムによって作られているその共同体の共有物、要するにコモンズなんですね。

では、コモンズは一体どう機能しているのか。たとえば、少し前になるけれど、菅総理が、自助、共助、公助の順番でやっていきましょうって言ったじゃないですか。

【加賀美】 ありましたね。

【山極】 みんな、何を言ってるんだって批判したけれど、実際、公助が全然うまくいかなかった。しかも、自助と言われたって困ると。まさに、時代的困難さが来ているわけです。われわれは家族も共同体も希薄になって、個人がバラバラにされたなかで、制度に付き合わされている。だけど、それでは生活できない人が増えてしまっている。

ここで重要なのは共助なんですよ。家族共同体という重層構造だと思っていたのは、実は共助の仕組みだったわけです。今われわれが考え直さなくちゃいけないのは、この共助をどうやって働かせていくかということです。家族や共同体がどんどん薄れていったのは、先程のコンビニや中食、あるいはボッチ席もいい例だけど、個人単位で物事が、政治も経済も、社会も動き始めてしまった結果なんですよ。この新型コロナウイルス禍のなかで、われわれはもっと助け合っているんじゃないか、そういったことを改めて考えるべきなんですね。

共同体とソーシャルキャピタル

この 150 人は社会関係資本、つまりソーシャルキャピタルと考えていいと思います。この 150 人は、言葉で結び付いた間柄ではなくて、過去に喜怒哀楽を共にした仲間や、あるいは一緒に暮らした人たちです。そして、そこには身体性が大きく関わっているから、無制限に広がってはいかない。ソーシャルキャピタルは、1,000 人や 10,000 人にはならない。今、われわれは SNS で何百、何千、何万という人とつながってるかもしれないけど、それはソーシャルキャピタルにはならない。

ソーシャルキャピタルは、自分が困難に直面したときに、疑いもなく相談できる相

手です。個人個人には、それが要なんですよ。それがないと安心して暮らすことができないから。政府も自治体も会社も、安心・安全と言う。たしかに安全は科学技術で改善できるかもしれない。けれど、安心はソーシャルキャピタルがもたらしてくれるのであって、安心できる人たちに囲まれているわけなければわれわれは暮らしていけないんです、本当はね。

なぜなら、どれだけ環境が安全になったとしても、人がそれを破るからです。今年、大阪で精神科の放火殺人事件や、訪問医療していたお医者さんが患者さんの家族に殺された事件などがあったけれど、それらは人の行為なんです。そうした不安がたまっていたとしたら、往来を安心して歩くこともできなくなるし、ホームに立って電車を待つことだってできなくなる。食事だって、誰かが毒を入れるかもしれないと思ったら、毒味しなければ食べられなくなっちゃうわけですよ。われわれは、そうしたことを一切しなくて済むような社会をつくってきたはずなのに、今、またそういう不安が募り始めている。

つまり、ソーシャルキャピタルというものが壊れはじめているわけです。それを、共助によって新たに作り直さなくちゃいけない。そのためには、地域社会でやっていたような社交が必要です。小さいレベルで言えば食事会だし、大きいレベルで言えばお祭りみたいなイベントですよ。そういった集まりを積極的に作っていかないといけない。

でも、今そういうコミュニティは、だんだんできなくなっているわけです。インターネット上で、バーチャルなコミュニティがたくさん出来ているのかもしれないけれど、それはバーチャルなものであって、実際のソーシャルキャピタルとしては機能し

ないんですよ。だからこそ、これから、改めてきちんと作り上げていくことが必要なのではないかと思います。

【加賀美】 地域生協でも、みんなで集まってわいわいおしゃべりしたり、食事をしたりといった、日常的な社交や交流がありました。実は今、そうしたものを作り直すことが、社会的に必要なになるだろうということですね。

【山極】 とくに、シェアとコモンズを拡大することが必要だと思います。今、だんだんと若者がシェアに慣れてきているでしょう。ぼくらの若い時代には、自己実現や自己責任と言われて、みんな一生懸命に個人主義を追求してきたけど、今はシェアが広がっている。理由はコストを下げるためであったり、あるいはモノを通じて人とつながったりするため、インターネットがそのために利用されている。これはね、いいことだと思うんです。

それに、コモンズを拡大していかなければならない。先程の子ども食堂もコモンズです。それに学校もコモンズですが、今はなかなかコモンズになりにくくなってる。本来、子どもだけの場所じゃないんですよ、学校は。だから、地域社会を巻き込んでいかなければいけない。公立・私立の学校の区別なく、学校というのは子どもを預かるだけの場所ではなくて、地域全体で子どもを育てていく場所だということを思い直したほうがいいんじゃないかと思います。もちろん大学もそうです。

こうした半分コモンズになりかかっているもの、あるいはコモンズになれなくなっているものを、きちんとコモンズに仕立て直す。これが、これからは必要になると思いますね。

それから、これまでは所有物が人間の価値を決めていたけれど、もうそれは常識でなくなっている。所有物ではなくて、行為が人間の価値を決めるという、考え方の転換を図らなくてはいけない。実際、インスタグラムや Facebook には、自分はこんな素敵なモノを持てますよというのではなく、自分はこういう体験しましたよ、こういうことをやりましたよ、これを見ましたよ、といったことを写真や映像であげることが多いですね。とくに若い人たちは、そうした方に移り始めている。

なぜなら、モノを持ていても、使わなければ意味がないからです。もし自分が使わないのだったら、フリマに出して交換したらいいわけです。そうした方向に経済をシフトさせていくことが必要なのではないかと思います。

『人新世の資本論』を書いた斎藤幸平さんも言っていますけれど、商品価値から使用価値へ。これまでは市場にモノがあふれていた。そのなかから、値段を見て、あるいは機能を見て、消費者が選んで買っていった。だから商品が余ってしまったんです。だけど、使用価値を重視すれば、モノは使ってなんぼだとなりますし、まだ使えるものであれば交換すればよいということになる。つまり、値段と使う価値が、必ずしも一致しないということを覚えたわけです。

今、ぼくは京都市動物園の名誉園長を務めています。京都市動物園で最近いいなと思う取り組みがあります。それは、農家さんで余った野菜や果物、商品としての規格に乗らないから市場に出せない野菜や果物を、捨てるのだったら頂いて動物たちに餌として与えるというものです。ただ、動物たちだけでなく、人間にとってもこの野菜の味は変わらないはず。本当は市場

に並べるために形をそろえる必要もなければ、色を付ける必要もない。そういうことを、もう一度見直して、食品の無駄やロスをなくしていかなければいけない。

あまりこういういい方はよくないかもしれないけれど、今までは大企業が商品の買取りと販売を一手に引き受けていて、そのなかでさまざまな戦略があった。とくに今は知識集約型社会だから、買取りと販売の両方を集めれば集めるほど、消費者を誘導できるわけです。だから、中小企業等がなかなか入りにくくなっているわけだけれども、別の方法はあると思います。

一つが、生産者と消費者を直接つなぐことです。たとえば、子ども食堂は、経営ではないですね。食材を寄付してもらうなど、ギフトや投資によって賄ってる。あるいは、生産者本意の方法であれば、消費者が生産者に投資をして、生産者が生産したものを消費者に配るということもあります。そうすれば、生産者は自分が作れる範囲で農作物を作れる。消費者も、常に自分が欲しいものが来るわけではないけれど、生産者がこの家庭にはこれを食べてもらいたいというものが届く。つまり、信頼、あるいは期待で結ばれるわけです。

今、われわれ消費者は、生産者の顔が見えず、値段がつけられ、均一化された商品を買わされているわけだけれど、そうではなくて、作る過程から生産者と一体になって、食物を生産・消費するというラインに参加していけば、食品ロスはなくなるし、信頼関係も生まれると思うんですよ。だからこそ、これからはそういう実践を積極的に進める必要があると思います。

地域のもつ力を活かす道とは

【加賀美】 コロナ禍の見通しは不透明ですが、これからの社会を考えるにあたって、人びとのつながりという点から、今だからこそ考えるべき問題について、先生はどのようにお考えでしょうか。

【山極】 ぼくは、ICT とか AI とか、そういった現代科学の粋を否定しているわけでありません。それらをワイズに、賢く利用すべきだと言っています。

国土交通省が、10 年あるいは 30 年後の日本では過疎や少子高齢化が問題になっていくから、過疎化が進む地域の人たちを都市へ集めるといっているけれど、それは大きな間違いです。過疎こそ強みなんです。人々が、それぞれ違った個人の生きがいを見つけながらぶつかり合える。つまり出会いと、気付きをお互いにできる社会というのは貴重なんですね。

たしかに病院が少なくなるとか学校がなくなるとかといったことはあるかもしれないけれど、それを現代の科学技術でカバーしていけばいい。今はもう遠隔診療だってできますし、ドローン使えば薬品を簡単に遠方に届けられる時代がもうすぐ来るでしょう。あるいは遠隔的な授業を併用しながら学校を地域に残して、そこで人々がつながりあっていく。

人間をどんどん都市に集中させてしまった結果が、このパンデミックでしょう。今、やっと東京の転出人口が転入人口を上回りました。これは一時的な現象かもしれないけれど、各地で関係者人口をどう扱うかということが問題になっています。関係者人口というのは、住民票を持っていないけれど、その地域に一定程度居住する人たちです。若い人たちが多いのだけれども、この

人たちをどうやって地域に受け入れて、地域の共同体を作っていくかが問われています。

今までは地域に職がないから若い人たちが残らない、集まらないって言われていましたけれど、僕は逆だと思っていて、若い人たちが集まれば、仕事が出来るとですよ。たとえば、僕の教えていた学生が、静岡県の富士宮にいますのだけど、彼女はエコロジックという法人で、地元のエコツーリズムをやるガイドなどをしています。その富士宮は、今、東京から一時的にいわゆるワーケーションで来る人などが増えている。そうすると、地元にはパン屋が出来るとだね。それから酒屋が儲かる。レストランができる。なぜなら、ワーケーションでみんなテント生活をしてるから、食べ物や飲み物なんかを買いに出るわけです。パンを買ってきて、テント場で火を焚いて、コーヒーを沸かして飲む。そういったニーズが増えてくるわけです。

そして、人が集まることで新しいアイデアが生まれて、いろいろなことができるようになる。今、日本全体では 840 万も空き家があるけれど、この空き家も、行政がちょっと手を入れるだけで、若い人たちが低コストで泊まれたり、居住したりできる場所に生まれ変わるわけだね。そうした人たちが、今まで放棄された畑で農作業をしたり、林業に携わったりしていけば、新しい産業が生まれるわけですよ。そういうことを、積極的に行政も地域の人たちも支援していかなければならない。

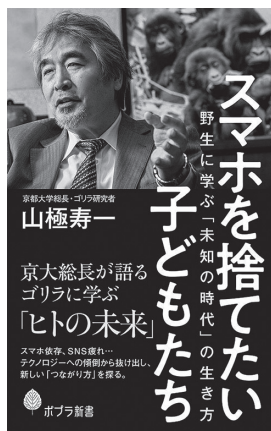
それが、これから日本が諸外国に比べて発展していく唯一の道ですよ。なぜかと言うと、今、日本が置かれてる状況は発展途上国と一緒だからです。東京に人口が集中してしまっている。これは発展途上国の在り方です。アメリカのワシントンに、どの

くらの人が住んでいるかという、60万人しかないんですよ。ロンドンだって、パリだって、ローマだって、1,000 万を超える人口の都市はありません。そういう意味では、日本は少しおかしいんですよ。

ただ、まだ地域が力を持っているからこそ、これからの可能性はある。明治に 47

都道府県に分かれたわけだけれども、それまでの 300 を超える藩文化が日本には残っていて、それがいまだに人々のアイデンティティにもなっている。産業自体も、まだ力を持っている。そういうものを生かしながら、これからやっていくことが必要なのではないだろうかと思います。

山極氏は、本インタビューでも触れられていた、ゴリラ研究に基づいた社会の考察について、多数の著作を發表されています。以下、コロナ禍以降に出版された山極氏の近著の一部を紹介します。本インタビューはリモートで行われ、紙幅にも限りがありますので、より詳細な内容に興味のある方は、ぜひ下記作品をご一読ください。



『スマホを捨てたい子どもたち 野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』(2020) ポプラ社。



『人生で大事なことはみんなゴリラから教わった』(2020) 家の光協会。



『京大というジャングルでゴリラ学者が考えたこと』(2021) 朝日新聞出版。